

朱子の性理論 (三)

青木晦藏稿

第十九節 道心の作用

(一) 道心の意義。朱子は道德的意識の意味を表はすに良心なる語を以てすることあり、明德又は道心なる語を以てすることあり。良心なる語はもと孟子の「雖存乎人者。豈無仁義之心哉。其所_三以放其良心者。亦猶斧斤之於木也。」(孟子告子章句第十二)より出でたるものにして朱子は之を解して

良心者。本然之善心。即仁義之心也。(孟子集注卷之六)

と云へり。蓋し良心は吾人の先天的に固有するものにして仁義の性の發現したるものを云ふ。故に性と良心との關係を云へば性は體にして良心は用に屬し、性は未發にして良心は已發に屬し、又性は寂然不動の靜的にして良心は感而遂通する動的のものど謂ふを得べし。而して良心の内容は惻隱羞惡辭讓是非の四端の心に外ならず。故に朱子は

大凡理只在入心。此心一定。則萬理畢見。亦非能自見也。心苟定矣。試一察之。則是是非非。

自然別得。且如慙隱羞惡辭讓是非。固是良心。苟不存養。則發不中節。顛倒錯亂。便是私心。（朱
と云へり。蓋し慙隱の心は良心中の情（狹義の情）に屬し、羞惡の心及び恭敬の心は意に屬し、是
非の心は智に屬するものと見るを得べし。又明德に就ては朱子は「明德者。人之所得乎天。而虛靈
不昧。以具衆理。而應萬事者也。」（大學章句第一章）として良心と同一の意味に解し、その内容は同じく
慙隱羞惡辭讓是非の心と爲せり。是れ朱子が

明德謂本有此明德也。孩提之童。無不知愛其親。及其長也。無不知敬其兄。其良知良能本自
有之。只爲私欲所蔽。故暗而不明。所謂明明德者。求所以明之也。（同上卷十四、十九頁）

明德未嘗息。時々發見於日用之間。如見非義而羞惡。見孺子入井而慙隱。見尊賢而恭敬。見善
事而歎慕。皆明德之發見也。（同上卷十四、十四頁）

と云へる所以にして良知良能は即ち良心中の智と意との作用を指したるものなれば、此れを以て
良心を意味するものと見るも不可なるべし。然るに朱子は道德的意識のことを云ふには良心又明
徳なる語を用ふること少くして多くは道心なる語を用ひたり。此の語はもと尙書大禹謨篇の

人心惟危。道心惟微。惟精惟一。允執厥中。

に出づ。（大禹謨は古文尙書の中に屬し、後世の偽作たること今日に在りては明々白々にして復た論を俟たず。故に惟朱子の用
語として之を用ふれば可なり。眞偽を考證するの要なし。此の言も苟子の引ける道經の「人心之危。道心之微。」に

出づ。所謂道經は如何たる書たるか詳ならず雖も、先王の道を傳へたるものにして老子の道を記述したる而して朱子の解ものにあらず。簡朝亮が「道經者蓋古籍也。猶道在丹書之類也。」と云へるもの眞を得たるに近かるべし。釋する所に據れば道心は義理より發する知覺作用にして人心は形氣即ち生理上より發する知覺作用を意味するものと見るを得べし。故にその言に曰く。

人心道心。只是這一箇心。知覺從耳目之欲上去。便是人心。知覺從義理上去。便是道心。（朱子語類卷七十八、二十四頁）

所謂人心者。是氣血和合做成。便是飢而思食。寒而思衣底心。道心是本來稟受得。仁義禮智之心。聖人以此二者。對待而言。正欲其察之精。而守之一也。（同上卷七十八、四十三頁）

如喜怒哀人心也。然無故而喜。喜至於過。而不能禁。無故而怒。怒至於甚。而不能遏。是皆爲人心所使也。須是喜其所當喜。怒其所當怒。乃是道心。（同上卷七十八、三十五頁）

此れに據れば道心なるものは即ち今の倫理學者の所謂道德的意識を意味するものにして、義理即ち仁義禮智の性より發現し來る現象的心作用を指したるものなれば、その内容は良心及び明德の内容と殆ど同じく惻隱羞惡辭讓是非の情即ち是れなり。故に道心の中には良心と同じく知覺、情操、意思の三作用を含み單に知覺の一作用に止まらず。然れども三作用の中に於て主要なるものは知覺の作用なれば、或は知覺作用のみを意味することなきにあらず。朱子が「知覺從義理上去。便是道心。」と云へるが如き即ち是れなり。然るに人心は生理的心作用と云ふべきものにして、主として形

氣の私より發する心作用を意味し、飢えては食を欲し渴しては飲を欲するが如き諸種の欲望を云ふ。此の生理的心作用は聖人と雖も之れ無き能はざるものなれば全く惡なるものと謂ふべからず。故に朱子は

道心是義理上發出來底、人心是人身上發出來底。雖聖人不能無人心。如飢食渴飲之類。雖小人不能無道心。如惻隱之心是也。但聖人於此擇之也精。守得徹頭徹尾。(同上卷七十八、三十五頁)

問。既云上智。何以更有人心。曰。掐着痛。抓着痒。此非人心而何。人自有人心道心。一箇生於血氣。一箇生於義理。飢寒痛痒。此人心也。惻隱羞惡是非辭遜。此道心也。雖上智亦同。(同上卷六十、九頁)

と云へり。此の如く道心人心共に普遍的存在なりと雖も、もし道心を以て人心を主宰し當に欲望すべきを欲望せしむるに非らずして、人心の發するまゝに任せて之を抑制する所なければ惡に陥り易き傾向なきにあらず。是れ人心惟危と云へる所以にして警戒を加ふべき必要あり。然るに人心と人欲とは同一のものにあらず。人心は人として有るべきものなれども人欲は一毫も有るべからざるものなり。故に朱子は此の理を説いて

若說道心天理。人心人欲。却定有兩箇心。人只有一箇心。但知覺得道理。底是道心。知覺聲色臭味。底是人心。不爭得多。人心人欲也。此語有病。雖上智不能無此。豈可謂全不是。陸子靜亦

以此語人。非有兩箇心。道心人心。本是一箇物事。但所知覺不同。(同上、卷七十八、三十五頁)

人心是知覺。口之於味。目之於色。耳之於聲底。未是不好。只是危。若便說做「人欲」。則屬惡了。

何用說危。道心是知覺義理底。惟微是微妙。(同上、三十七頁)

と云へり。然るに朱子が程子の言を擧げて「程子曰。人心人欲故危殆。道心天理故精微。惟精以致之。惟一以守之。如此方能執中。此言盡之矣」(同上三十八頁)と云ひ、又その門人方子が「人心

惟危。程子曰。人心人欲也。恐未便是人欲」。と問へるに對して「人欲也未便是不好。謂之危者。危險欲墮未墮之間。若無道心以御之。則一向入於邪惡。又不止於危也」(同上三十四頁)と云へるが如

きは人心を以て人欲と同一視したるものにして、此の説は朱子未定の説に屬し後年の定説に異なるものあれば従ふべからず。後年の定説は前に擧ぐるが如く人心と人欲とを區別し、人心は全然不好のものにあらずして道心之を主宰せざる時不好に陥るものとし、人欲は初めより全然不好のものとして爲せり。

此の如く人心と道心とを別つときは吾人に二心存在するが如くなれども實は然らず。只一心に就てその作用を分つて二と爲したるのみ、二箇の心ありと謂ふに非らざるなり。故に朱子は

人心道心。元來只是一箇心。只是分別兩邊說。人心便成一邊。道心便成一邊。既能辨之明。又能守之固。斯得其中矣。(同上卷七十八、三十七頁)

自人心而收之。則是道心。自道心而放之。便是人心。惟聖罔念作狂。惟狂克念。作聖近之。

(同上)

と云へり。朱子は又孟子に所謂求放心の說に就ても亦同一の說を爲し、放心を求むる心と求めらるゝ心とは一にして二あるものにあらずして求むる心便ち是れ已に收まるの心と爲せり。その言に

人心終讒時便在。孟子說求放心。求字早是遲了。(同上卷五十九、三十五頁)

求放心。非以一心求一心。只求底便是已收之心。操則存。非以一心操一心。只操底便是已存之心。心雖放千里之遠。只一收便在。此他本無去來也。(同上)

とあるが如きは即ち是れにしてその他「知求則心在矣。今以已在之心復求心。卽是有兩心矣。」と云ひ「知得心放。此心便在這裏。更何用求。」と云へるが如き亦此の理に外ならず。朱子は又孔子の所謂「操則存。舍則亡。出入無時。莫知其鄉。惟心之謂與。」(孟子告子章句十二)に就ても心は一のみ操りて存すれば義理明かにして之を道心と謂ひ、捨てゝ亡ぶれば物欲肆まゝにして之を人心と謂ふ。人心よりして回收したるもの便ち是れ道心にして、道心よりして放出したるもの便ち是れ人心と云ふべくして二心にあるにあらずと爲せり。故に朱子は又

存者道心也。亡者人心也。心一也。非是實有此二心。各爲一物。不相交涉也。但以存亡而異其名耳。方其亡也。固非心之本然。亦不可謂別是一箇有存亡出入之心。却待反本還原。別求一

箇無存亡出入之心來換却。只此心但不存便亡。不亡便存。中間無空隙處。所以學者必汲々於操存。而雖舜禹之間。亦以「精一」爲「戒也」。(朱子文集卷四十、三十八頁)

と云へり。人心と道心との關係を云へば此の如く人心の義理を得るもの即ち道心にして、道心の義理を失ふもの即ち人心と謂ふを得べし。故に朱子の説は一心を分析して二と爲すと雖も、道心人心の二心ありと謂ふに非らず。唯一心の作用を分つて二と爲したるに過ぎず。然るに朱子が道心人心並び説くを以て二心の存在を認めたりと云ふが如きは、朱子の本旨を知らざるものと謂はざるべからず。蓋し道心は純粹の天理より發して現象作用となりたるものなれば善にして惡あらずと雖も、人心には天理より發するものあり、人欲より發するものあれば善あり惡ありと謂はざるべからず。是れ人心の危殆に陥り易きを警めたる所以なり。故に心を治むるにはその道心たるか人心たるかを精密に省察して一念の發其の道心たるを知れば擴めて之を充たしめ、其の人心たるを知れば痛く之を節制し、道心主となり人心を化して道心と一體ならしめ以て心の欲する所に従ひ矩を踰えざるの境に達せざるべからず。故に朱子は

心之虛靈知覺一而已矣。而以爲有「人心道心之異者」。則以其或生於形氣之私。或原性命之正。而所以爲「知覺者不同」。是以或危殆而不安。或微妙而難見耳。然人莫不有是形。故雖「上智」。不能無「人心」。亦莫不有是性。故雖「下愚」。不能無道心。二者雜於方寸之間。而不知所以治之。則危

者愈危。微者愈微。而天理之公。卒無以勝夫人欲之私矣。精則察夫二者之間。而不雜也。一則守其本心之正。而不離也。從事於斯。無少間斷。必使道心常爲一身之主。而人心每聽命焉。則危者安。微者著。而動靜云爲。自無過不及之差矣。(中庸章句序)

と云へり。朱子が道心常爲一身之主。而人心每聽命と云へるを見れば二心の存在を意味するが如く解せられざるにあらず。故に王陽明の如きは之を非として

心一也。未雜於人。謂之道心。雜以人僞。謂之人心。人心之得其正者即道心。道心之失其正者即人心。初非有二心也。今日道心爲主。而人心聽命。是二心也。天理人欲不並立。安有天理爲主。人欲又從而聽命者。(標注傳習錄卷上、十四頁)

と云へり。陽明の所謂「人心之得其正者即道心。道心之失其正者即人心。」は朱子の所謂「自人心而收之。則是道心。自道心而放之。便是人心。」と殆ど同一の意味を説けるものにして人心及び道心の本質を解釋するものなれども、所謂道心爲主。人心聽命は修養の工夫を説けるものなり。精一の工夫既に到りて理想の境地に到達すれば、人心化して道心と一體となりその間に毫も罅隙の存するものなれども、精一の工夫未だ到らざるときは心中に人心と道心と二箇の作用ありて衝突するが如く感ずるを常とす。此の時に當りて道心主となり人心之に化すれば人心化して道心となり道心と人心との區別を見ざるべし。朱子の謂へる所は即ち人欲を去りて天理を存することを云へるもの

なれば、天理人欲の並存を意味するものにあらず。故に陸桴亭が朱子の言へる所の意味を解して

人心卽氣質。道心卽義理。道心只就「人心中合於道者」言之。非有二心。道心爲主。而人心聽命。

此是說工夫。既知本體之危微如此。便須「下精一執中工夫」。猶孟子言「人之異于禽獸者幾希。而後言庶民去之。君子存之也。先言本體。使人知危微可畏。則不敢忘戒慎恐懼之功。繼言工夫。

使人知精一可憑。則可徐收致中致和之効。」（思辨錄輯要後集卷之五、一頁）

と云へるは能く朱子の本旨を得たるものなり。然るに陽明が初め道心人心の本質を説明したるは誤る所なくして其正を得たるものなれども、「天理人欲不並立。安有天理爲主。人欲又從而聽命者。」と云へるは朱子の説を以て誤りと爲し二心の存在を認めたるものと爲せり。然れどもに朱子が道心爲主。而人心聽命。」と云へるはもと修養の工夫を云へるものなれば、治むる道心と治めらるゝ人心の存在を假認せざるべからず。陽明が之を非難するは本質と修養の工夫とを混合せるものにして朱子の論は正當なれば決して誤れるものと謂ふべからず。

(二) 知覺の作用。吾人の有する道心なるものは廣義を以て云へば、心の全體の作用を意味したるものにしてその中には情、意、知の作用を包含せるものならざるべからず。然るに狹義を以て云へば道心は道理を知覺する知覺的作用を意味するものにして、その中に情及び意の作用を包含するものにあらず。然れども此の心は情及び意の作用の基礎となるものにして情意の作用の如きは皆道心の知

覺認識によりて始めて起るものとす。然らば此の道心即ち知覺作用とは如何なるものなるかと云へば朱子は之れを解して

知○則○心○之○神○明○。○妙○衆○理○。○而○宰○萬○物○者○也○。(大學或問大全十八頁)

と云へり。此の知の定義は朱子の心の定義たる「心者人之神明。所以具衆理而應萬事者也。」及び明德の定義たる「明德者人之所得乎天。而虛靈不昧。以具衆理。而應萬事者也。」と相似たる所ありと雖も、彼れは心の意義を説明せるものにして此れは心の中の知の意義を説明せるものなればその間に自ら異なる所あり。蓋し心の體の虛靈不昧(又神明)なるは心の中に神明なる知の具はれが爲め然るものして、もし心の中に神明なる知の存することなくんば、たとひ衆理を具ふるも之を鑒照して知覺するを得ざるべし。而して心は衆理を具ふるものなれども、之を運用して衆理を知覺するものは知の作用に屬し、又心は能く萬事に應ずるものなれども之を主宰してその宜しきを得しむるものは知の作用に屬す。故に朱子此の意を説明して、

神是恁地精彩。明是恁地光明。(朱子語類卷十七、十三頁)

心無事時都不見。到得應事接物。便在這裏。應事了又不見。恁地鬼神出沒。(同上)

大凡道理皆是我自有之物。非從外得。所謂知者。便只是知得我底道理。非是以我之知。去知彼道理也。道理固本有用。知方發得出來。若無知道理。何從而見。所以謂之妙衆理。猶言能運用衆

理也。運用字有病。故只下得妙字。(同上)

問。知如何宰物。曰。無所知覺。則不足以宰制萬物。要宰制他。也須是知覺。(同上)

と云へり。此れに據れば心之神明は體にして妙衆理而宰萬物は用に屬し、心と知との關係より云へば心の具衆理は心に在りては體に屬すれども、知の妙衆理は此によりて衆理を知覺認識するものなれば用と云はざるべからず。而して心の應萬事は心に在りては用に屬すれども、知の宰萬物は認識したるものを以て理想と爲し、此によりて萬事を制して實現するものなれば體を立つることゝなるべし。此の義は胡雲峰及び顧涇陽の解釋すると所能く朱子の本旨を得たり。胡雲峰が蓋此心本具衆理。而妙之則在知。此心能應萬事。而宰之亦在知。具者其體之立。有以妙之。則其用行。應者用之行。有以宰之。則其體立。(四書通卷一、五頁)と云ひ、而して顧涇陽も亦

心與知一而二。二而一者也。心統性情。具衆理性也。心之體也。知則在體中爲用。故以妙衆理言之。應萬事情也。心之用也。知則在用中爲體。故以宰萬物言之。如此體認。可見此老下語十分精密。眞是一字不可移動。(小心齋劄記丙午、十頁)

と云へるもの即ち是れなり。今朱子の説及び明德の定義を參考して知に於ける定義の中に含まるゝ意味を考察するに、凡そ四箇の意味あるを見るべし。

(一) 吾人の有する知は先天的固有のものたること。

(二) 知はその本質神明(虚靈不昧)なるものなれば能く衆理を辨別認識して誤らざること。

(三) 知はその心に具はれる宇宙及び人生の衆理を知覺認識する用を爲すこと。

(四) 知は認識したる理を以てその理想を爲して萬事の基礎を確立すること。

即ち是れなり。之を要するに知は宇宙及び人生の眞理を認識し是非を判明して人生の理想を設定するの作用を爲すものと見るを得べし。

(イ) 知識の根本 知には先天的眞知と後天的知識とありて宇宙及び人生の眞理を認識するには

先天的眞知によるべきは勿論なりと雖も、決して後天的知識を除外し得べきものにあらず。蓋し先天的眞知は體にして後天的知識は用に屬し、此の二者はもと分離すべからざるものなればなり。故に朱子は窮理の知を以て眞知と爲し、

致知所以求爲眞知。眞知是夢徹骨都見得透。(朱子語類卷十五、二頁)

致知乃本心之知。如一而鏡子。本全體通明。只被昏翳了。而今遂旋磨去。使四邊皆照見。其明無所不到。(同上)

孩提之童。莫不知愛其親。及其長也。莫不知敬其兄。人皆有此知。而不能極盡其知者。人欲害之也。(同上卷十五、十頁)

と云へり。此の他にも「人之良知。本所固有。然不能窮理者。只是足於已知已達。而不能窮其未_レ知未_レ達。」(同上卷十八、三頁)と云へる所を見れば、此の知は先天的良知を云へること明かなり。蓋し良知(又真知)は吾人の先天的に固有するものにして經驗によりて始めて得たるものにあらず。然れども真知は全く見聞の經驗を假らざるものにあらず。朱子が窮理の方法として事爲の著に考へ、文字の中に求め、議論の際に索むべきことを説ける所を見れば、見聞の經驗的知識は全く無用のものにあらずして真知の認識に資する所なしと謂ふべからず。但理を認識するに當りて主となるものは先天的真知にして經驗的知識は之を輔くるの用を爲すものなれば、經驗的知識と雖も決して之を斥くべきにあらず。朱子が大學章句に於て知を解して「知猶識也。」と云へるは之れが爲めなり。朱子の所謂「知猶識也。」の知は真知を指し、識は知識を指したるものにして知は體に屬し識は用に屬す。故に朱子の此の解釋は體用を兼ねたるものと謂ふべし。此れに由りて之を觀れば理を認識するに當りては先天的真知と後天的知識と二者を闕くべからざるものと認めたること明かなり。方柏堂が朱子の説を解釋して

朱子解致知曰。知猶識也。不是以識解知。是以識指點知。知是心體。靈明之全。識是用。發露之一端。推極吾之知識。謂當就此一點靈明發端處。向裏窮究。向外推擴。使其表裏精粗無不到。而後吾心之全體大用無不明也。(方柏堂全集、讀學庸筆記一、四頁)

と云へるものは朱子の本旨を得たるものと謂ふべし。或は朱子の「知猶識也」と云へるを以て専ら知識を意味するものにして眞知を指して云ふに非らずと言ふものあり。是れ朱子の本旨の在る所を窮めずして妄斷するものにして、朱子の本意より云へば理を認識する主體は先天的眞知に在りて後天的知識は眞知の發用に外ならざれば、知の體と用とを兼ねて言へるものと見ざるべからず。故に朱子の説は此の點に於ても精密にして滲漏なしと謂ふべし。

(ロ) 知識の本質。朱子は心の意味を解して人之神明と云ひ、又明德を解して虚靈不昧と云へること前に述ぶるが如し。此の心(又明德)の神明(又虚靈不昧)なるはもと心の中に知の存するが爲めに外ならず、而して知の本質はもと神明(虚靈不昧)なるものなれば能く衆理を妙にして萬物を宰し得べき妙用を具備して一も缺くる所なし。故に朱子は知の光明にして照さざる所なきを説いて以爲らく、明德是自家心中。具許多道理在這裡。本是箇明底物事。初無暗昧。人得之則爲德。如惻隱羞惡辭讓是非。是從自家心裡出來。觸着那物。便是那箇物出來。何嘗不明。緣爲物欲所蔽。故其明易昏。如鏡本明。被外物點汚則不明了。少間磨起。則其明又能照物。(朱子語類卷十四、十五頁)

此れに據れば吾人の眞知はもと光明昭著にして一理一事の微と雖も、明々白々照らさざる所なく覺らざる所なし。故に惻隱すべきに當りては能く惻隱し、羞惡すべきに當りては能く羞惡し、辭讓是非すべきに當りては能く辭讓是非して毫も誤る所なきを得べし。又此の知は即ち是非の心にして是

なるものは之を是と爲し非なるものは之を非と爲し能く是非善惡を辨別して誤る所なし。是れ亦その本質の神明なるに由るものと謂はざるべからず。故に朱子此の理を説いて

見得是便有是之心。見得非便是有非之心。從那縫罅裏迸將出來。恰似寶塔裏面四面毫光放出來。(同上卷五十三、十三頁)

事々物々上。各有箇是。有箇非。是底自家心裏定道是。非底自家心裏定道非。就事物上看。是底定是。是非底是非。到得所以是之。所以非之。却只在自家。此人々有之。同得於天下。不待問別人假借。(同上卷十五、四頁)

と云へり。吾人は此の如く光明昭著なる知即ち是非の心を有するを以て是非善惡の辨別を誤らざるのみならず。義利の辨公私の別忠佞の分君子小人の別より天下社會一切の事理に至るまで之を辨別して誤る所なきを得べし。かくしてその辨別を誤らざる時は是なるもの善なるものは之を認識し、非なるもの惡なるものは之を否認することゝなるべし。故に是非善惡等の辨別は即ち認識を意味するものなり。且吾人の眞知は獨り先明なるのみならず、靈妙不測のものなれば能く感じて遂に通ずるの妙用を有し、千萬里の遠きも千百世の上も一念纔に發すれば便ち通達するを得て、能く所當然の理を知るみならず所以然の理を覺ることを得べし。朱子は又此の理を説いて

此心至靈。細入毫芒纖芥之間。便知便覺。六合之大。莫不在此。又如古初去今是幾千萬年。若

此念才發。便也到那裡。下面方來。又不知是幾千萬年。若此念才發。便也到那裡。這箇神明不測。至虛至靈。是甚次第。然人莫不有此心。多是但知有利欲。被利欲將這箇心包了。起居動作。只是有甚可喜物事。有甚可好物事。一念才動。便是這箇物事。(同上卷十八、十六頁)

と云へり。吾人の知たるやその至神至靈にして能く宇宙及び人生の理を認知して誤るなきこと此の如し。然るに良知の判別に誤謬あるが如く感ずること無きにあらず。是れ果して良知の辨別する所に誤謬あるか、將た他に眞知の辨別をして誤謬ならしむるもの存するか。朱子の説に據れば吾人の眞知はもと至神至靈光明煊赫たるものなれば、其辨別する所に誤謬の存することあるべからず。その辨別に誤謬あるは氣稟物欲の眞知を昏蔽するものあるに由らずんばあらずと云ふに在り。故に曰く明德不特是靜中發見。雖動中亦發見。孟子將孺子將入井處。來明這道理。蓋赤子入井。人所共見。能於此發端處。推明便是明。蓋人心至靈。有什麼事不知。有什麼事不曉。有什麼道理不具在。這裡何緣有不明。爲是氣稟之偏。又爲物欲所亂。如目之於色。耳之於聲。口之於味。鼻之於臭。四肢之於安佚。所以不明。然而其德本至明物事。終是遮不得。必有時發見。便教至惡之人。亦有時乎有善念之發。學者便當因其明處下工夫。一向明將去。致知格物。皆是事也。(同上卷十四、十六頁)

蓋し聖人はその氣質純明純美なるが故に氣質の爲めに昏蔽せらるゝことなく其の天理自然のまゝ

に順發し來るを以てその辨別する所毫も誤ることなければ、常人に在りてはその氣質昏濁粗惡なるを以て或はその氣質の爲めに昏蔽せらるゝを免れず。是を以てその辨別する所誤謬なき能はず。故に此の誤謬は眞知より生ずるものにあらずして氣質に由るものと謂はざるべからず。眞知は此の如く氣稟の爲めに昏蔽せらるゝことありと雖も、其の本然の光明は決して消滅するものにあざれば、能く修治の工夫を加へて昏蔽を去りたらんには、本來の眞知復た光を發して能く辨別し能く認識して誤ることなきを得べし。是れ朱子が

人本來皆具此明德。德内便有此仁義禮智四者。只被外物汨沒了。不明便都壞了。所以大學之道。

必先明此明德。若能學則能知覺此明德。常自存得。便去刮剔。不爲物欲所蔽。推而事父孝事君忠。推而齊家治國平天下。皆只此理。(同上卷十四、十四頁)

氣質物欲二者相因。反覆深固。是以此德之明。日益昏昧。而此心之靈。其所知者。不過情欲利益之私而已。然而本明之體。得之於天。終有不可得而昧者。是以雖其昏蔽之極。而介然之頃。一有覺焉。則卽此空隙之中。而其本體已洞然矣。(大學或問大全、十頁)

と云へる所以にして能く此の地位に到ればその本體の明を回復するを得べく、漸次擴充發展すれば終には大悟徹底の境に達し得て聖人と異なる所なきに至るべし。而して吾人が此の境に至るも其の本體の明を復し得たるのみにして、別にその性分の外に作爲したるものに非らざる也。

(ハ) 知識の運用。吾人の知識が「心之神明。妙衆理而宰萬物」者也。「より云へばその作用の主なるものは(一)事物の理を認識すること。(二)理想を設立することに在るは前に述ぶるが如し。而して理想の設立の如きは衆理の認識によりて爲し得べきものなれば、衆理の認識は又理想設立の基礎と謂はざる心からず。是れ朱子が窮理を重んじて

蓋爲學之道。莫先於窮理。夫天下之事。莫不有理。爲君臣者。有君臣之理。爲父子者。有父子之理。爲夫婦。爲兄弟。爲朋友。以至出入起居應事接物之際。亦莫不各有理焉。有以窮之。則自君臣之大。以至事物之微。莫不知其所以然。與其所當然。而亡纖芥之疑。善則從之。惡則去之。而無毫髮之累。此爲學所以莫先於窮理也。(朱子文集卷十四、十二頁)

と云へる所以にして人生に於ける一切行動の基礎となるもの皆窮理認識に在らざるなきを知るべし。朱子の所謂窮理は大學に所謂格物致知と同じく事物の理を窮め之を認識することを謂へるものにして、此の窮理認識はその知識に由りて爲し得べきものなり。朱子の言に

至於天下之物。必各有所以然之故。與其所當然之則。所謂理也。人莫不知。而或不能使其精粗隱顯究極無餘。則理所未窮。知必有蔽。雖勉強以致之。亦不可得而致矣。故致知之道。在乎即事觀理以格夫物。格者極至之謂。言窮之至其極也。(大學或問大全、十九頁)

とあるは此の理を説けるものにして、吾人がその知識を以て事物を窮格すれば、その結果は物格

り知致りて一旦豁然として衆物の表裏精粗到らざる所なくして、心の全體大用明かならざる所なきに至るべし。是れ窮理の極致にして此の境に達すれば、その認識したる理は眞に誠意の基礎となる。而して此の誠意の基礎となれるものは即ち理想なり。是れ朱子が

物格者事物之理。各有以詣其極。而無餘之謂也。理之在物者。既詣其極而無餘。則知之在我者。亦隨所詣而無不盡矣。知無不盡。則心之所發。能一於理。而無自欺矣。(同上、二十三頁)

知止云者。物格知至。而於天下之事。皆有以知其至善之所在。是吾所當止之地也。能知所止。則方寸之間。事々物々。皆有定理矣。(同上、十九頁)

と云へる所以なり。故に知識の運用は此の衆理の認識と理想の設立とに止まり此れ以上は意思活動に屬す。大學に所謂知止の如きも知に屬すれども、定靜安慮得の五作用に至りては意に屬するものと見ざるべからず。而して意志活動によりてその理想を實現するは、即ち知識に於ける理の認識と理想の設立とがその根柢となるものなれば、知識の二作用は即て人生生活の基準なりと謂ふを得べし。(窮理認識に關することは後章に至りて詳論すべし。今は只知識の作用によりて窮理認識するを得るを明かにすれば足れり)

由りて然るかど云へば。吾人の知識には思惟知覺の作用あるが爲めなりと得はざるべからず。(朱子の思惟に就ては思又は思量と云へり、思は「能致其知則思自然明」と云へるに徴すべく、思量は「向思量這箇」及び「每」常思量着「極好矣」と云へるを徴して知るべし。然れども、には思惟の字を用ふ。朱子もかつて思維の字を用ひしことあり) 思惟によりてその理を認識し悟得するを得ることは古聖賢の既に言へる所にして、孔子は「學而不思則

罔。思而不學則殆。」（論語爲政第二）と云ひ、孟子も亦「心之官則思。思則得之。不思則不得也。此天之所與我者。先立乎其大者。則其小者不能奪也。」と云へり。以て理を認識悟得するに思惟の必要なるを知るべし。而して知と思惟との關係を云へば、知は思惟の體にして思惟は知の用なり。吾人には眞知を有するが故に思惟の作用あり。思惟の作用あるを以て能くその心に具有する衆理を知覺するを得べし。故に語類に左の言あり。

問知與思於身最切緊。曰然。二者只是一事。知如手。思是使那手去做事。思所以用夫知也。
（同上卷七十四頁）

朱子の此こゝに所謂知とは先天的眞知なる體を謂ふに非らずして思惟により生ずる知覺の作用を指して云へるなり。而して所謂知覺とは知と覺との二作用にして、知とは思惟によりて所當然の理を知るを云ひ、覺とは思惟によりて所以然の理を悟得するを云ふ。朱子が二者の區別を説いて、知謂識其事之所當然。覺謂悟其理之所以然。（孟子集注卷之五）

と云へるもの即ち是れなり。朱子が又揚龜山の説を引き且知覺の二作用の異なるを説いて

龜山曰。知是知此事。覺是覺此理。且如知得君之仁臣之敬。子之孝父之慈。是知此事也。又知得君之所以仁。臣之所以敬。父之所以慈。子之所以孝。是覺此理也。（朱子語類卷十七、十五頁）

先覺後覺之覺。是自悟之覺。似大學說格物致知豁然貫通處。今人知得此事。講解得這道理。皆

知之之事。及其自悟。則又自有箇見解處。(同上卷五十八、十頁)

と云へるもの亦此れに外ならず。蓋し知と覺との間に知る所の淺深あること此の如し。而して朱子は更に所當然の理を知るの必要なるを説いて、

理是定便在這裏。心便是運用這理底。須是知得到。知若不到。欲爲善也未肯便與爾爲善。欲不爲惡。也未肯便不與爾爲惡。知得到了。直是如飢渴之於飲食。而今不講書時。也須收斂身心。教在這裏。乃程子所謂敬也。(同上卷十七、十四頁)

と云へり。而して所以然の理を覺悟する所の所謂覺にも二箇の悟法あるものゝ如し。(一)は一時的の覺悟にして、(二)は最終の徹底的覺悟なり。此の二箇の覺悟はもと相異なるものにあらずして一箇のものなりと雖も生熟の上に於て相異なる所あるのみ。蓋し徹底的覺悟は所謂一旦豁然として貫通する覺悟を意味するものにして、一時の覺悟の積累によりて得たる最後のものなり。一時の覺悟は或は退轉することあるを免れざれども、徹底的覺悟は永久に退轉することなかるべし。朱子言へる所の

如擊石之火。只是些子纔引者。便可以燎原。若必欲等大覺了方去格物致知。如何等得這般時節。那箇覺是物格知至了。大徹悟到恁地時事都了。若是介然之覺。一日之間。共發也無時無數。只

要人識認得。操持充養將去。(同上卷十七、七頁)

の如き即ち是れなり。此れに由りて之を觀れば宇宙及び人生に於ける所當然の理を知り得るものは知にして、宇宙及び人生に於ける所以然の理を覺り得るものは覺なり。而して知は現象界に於ける事々物々の零細なる理を知るに止まれども、覺は本體界に於ける全體の理を覺るものにして、吾人が先づ知によりて事々物々の零細的部分的の理を知るときは、多くの知識を積累するの結果遂に一旦豁然として全體的根本的の理を覺るを得て、所謂全體大用明かならざることなきに至るべし。之を理想の極致と爲す。朱子此の理を説いて曰く、

即夫事物之中。因其所知之理。推而究之。以各到乎其極。則吾之知識。亦得以周遍精切而無不盡也。身心性情之德。人倫日用之常。以至天地鬼神之變。鳥獸草木之宜。自其一物之中。莫不有以見其所當然而不容已。與其所以然而不可易者。必其表裏精粗無所不盡。而又益推其類以通之。至於一日脫然而貫通焉。則於天下之物。皆有以究其義理精微之所極。而吾之聰明睿智。亦皆有以極其心之本體。而無不盡矣。(大學或問大全、六十頁)

蓋し吾人の知なるものはもどその心に具はれる衆理を主宰運用する力を有するを以て、能く衆理を窮め盡して精微の極に至れば、それと同時にその心の全體大用盡さざる所なく心即理、理即心となり主客内外一致の境に達するを得べきなり。而して吾人が此の如く個々別々に於ける萬殊の理を知ると共にその理の一本の原理に統一せらるゝを覺るときはその知覺したる理は即ち理想目的とな

るべし。かの孔子が曾子を呼んで「參乎。吾道一以貫之。」と云ひ、又子貢を呼んで「賜也女以予爲多學而識之者與。對曰。然。非與。曰。非也。予一以貫之。」と云へるが如き行を以て云ふと知を以て云ふとの相違ありと雖も、その全體の理の部分の理を統一貫せるを覺るに至りては一なり。既にその理を覺り此れを目的と爲せば之を實現せざるべからず。此れ格物致知に次ぐに誠意を以てする所以なり。故に誠意は此の理想を眞實に好みて以て自謙の境に達すべきを説けるものなり。

此の知覺はもと氣より發するものか、將た理より發するものかと云ふに、蓋し知覺には氣より發するものと理より發するものとありて、道心は義理より發し人心は形氣より發すること既に上文に云ふ所の如し。此に所謂知覺は道心に屬するものなれば理の發たること論を俟たず。然るに本來理は氣を離れず氣は理を離れざるものにして、此の理の發するや氣を通じて知覺を爲すものなれば理氣の妙合と謂はざるべからず。故に朱子は

問。知覺是心之靈固如此。抑氣之爲邪。曰。不專是氣。是先有知覺之理。理未_レ知覺。氣聚成形。理與氣合。便能知覺。譬如_レ這燭火。是因_レ得_レ這脂膏。便有_レ許多光燄。(朱子語類卷五、三頁)

所_レ知覺者是理。理不_レ離_レ知覺。知覺不_レ離_レ理。(同上)

所_レ覺者心之理也。能覺者氣之靈也。(同上四頁)

と云へり。此れに據れば心に具はれる理は知覺すべき所以の理なれば、未だ知覺の活動となり現は

るゝものにあらずして未發のものなれども、氣と妙合するときは現れて能く知覺の作用を爲すを得べし。故に知の能く知覺するは理氣の妙合と謂はざるべからず。然るに知覺が認識するより云へば知覺は認識の主體にして理は認識せらるゝ客體なり。故に朱子は「所覺者心之理也。」と云へり。然れば知覺が氣を通じて現はれて能く靈妙なる作用を爲す所より云へば之を以て氣と云ふも不可なかるべし。是れ朱子が「能覺者氣之靈也。」と云へる所以なり。蓋し知覺の能く靈妙なるは理氣の妙合によるものにして理又は氣のみにては能く靈なるものにあらず。此の點より云へば知覺を以て氣と爲すは心を以て氣と爲すと同一の理にして、知覺は理に本づくとも雖もその理の氣を通じて現はれて現象となる所より云ふものなれば、同じく氣と云ふとも雖も形氣の私より發する人心とは區別して視ざるべからず。

第二十節 情意の作用

(一) 情意の意義 情には廣義の情と狹義の情とありて廣義の情は前にも述べたるが如く性に對するものにして性の發現したるものなれば、性は心の本體にして情は心の作用と謂はざるべからず。故に情の中には惻隱、羞惡、恭敬辭讓、是非の如き四端の心を包含す。是れ朱子に「情者性之動也。」の言ある所以にして、朱子は凡そ現象界に於ける事物に接して性の發動するものを名づけて情と謂へり。今の語を以て云へば心理作用と稱するが如し。然るに狹義に於ける情は今の語を以て云へば感

情又は情緒情操の如きものにして廣義の情の一部分に屬す。故に狹義の情は廣義の情に於ける是非の心の如き智の作用及び羞惡辭讓の心の如き意の作用を除きたる其餘の惻隱の心の如き喜怒哀樂の情の如きものにして廣義の情たると共に狹義の情なりと云はざるべからず。然れば狹義の情とは感ずる所に隨つて或は喜ばしく或は哀しく心の動きて浮び出づるものを指して云へるなり。

(イ) 情及び意。然るに情は朱子の云へるが如く性之動なれども意は「心之所發也」とすれば情と意とは相違する所なかるべからず。蓋し情は感に隨つて自然に發露する心の作用なれども、意は心の事に當つて故らに發する作用にして自然に發し來るものにあらず。その中には思慮選擇決斷するが如き作用を爲し、情は一般のものなれども意は自己的の作用を爲すの相違あるものゝ如し。朱子の言に

情是性之發。情是發出恁地。意是主張要恁地。如愛那物是情。所以去愛那物是意。情如舟車。意如入去使那舟車一般。(朱子語類卷五、十四頁)

問情意之別。曰。情是會做底。意是去百般計較做底。意因有是情而後用。(同上)

問。情意如何體認。曰。性情則一。性是不動。情是動處。意則有主向。如好惡是情。好(好色)惡(惡臭)便是意。(同上)

と云へり。此れに據れば情は事物に接して自然に發動し來る自然物のものなれども、意は情の作

用を受けて故らに一念を發し一事を生ずるものを指して云ふ。蓋し意は是れ心の念慮の萌動する處に就て云へるものにして、蔡虛齋が所謂「意者心之萌也。心該動靜。意只是動之端。意與情不同。意者心之發。情者性之動。情出於性。隨感而應無意者也。意則吾心之所欲也。視情爲着力矣。」（大學蒙引卷一、八十四頁）に當れり。之を譬ふれば情は人の酸鼻忍びざるの事に接すれば其の中に存する仁の理は自然隱惻の心となりて現はれ、又人の殘忍刻薄の事に接すれば其の中に存する義の理は自然羞惡の心となりて現はれ來るものにして、意は一念の發するに當りて何れの方法に依るべきかを思慮し、何れに従ふべきかを選択して然る後決定して一を取り一を舍つるの心理的活動を爲すを云ふ。故に情は公共にして人に依りて異なるものにあられども、意は私にして其の意思する所は人に依りて同一にあらざるべし。朱子の言に曰く、

性者即天理也。萬物稟而受之。無一理不具。心者一身之主宰。意者心之所發。情者性之所動。氣者即吾之血氣。而充乎體者也。比於他則有形氣。而較粗者也。舍心無以見理。舍性無以見心。（朱子語類卷五、十五頁）

問情比意如何。曰。情又意底骨子。志與意都屬情。情字較大。性情字皆從心。所以說心統性情。心兼體用而言。性是心之理。情是心之用。（同上）

情はもと心の用にして人の無きこと能はざる者なれば、是れもと不好なる者と謂ふべからず。但其の

情たる所以の者は各箇の當然の則ありてその大目は喜怒哀懼愛惡欲の七者と爲る。中庸には只喜怒哀樂の四者を説き、孟子には又惻隱羞惡辭讓是非の四端を指して云へり。當に喜怒哀樂すべくして喜怒哀樂し、當に惻隱羞惡辭讓是非すべくして惻隱羞惡辭讓是非するが如きは、便ち當然の則に合ひ便ち發して節に中る。便ち是れ其の中の性體流行して此に著見するものなれば之を達道と云ふ。其の當に然るべからずして然り其の則に違うて其節を失ふが如きは、只是れ箇の私意人欲の行はるゝものにして遂に不好の物となるを免れず。然れども本來便ち不好なるに非らずして只是れ一時の私意人欲によるものと謂はざるべからず。然るに惻隱の情を起すに當りて如何にして之を救濟すべきかを思慮選擇決定するが如きは意思の作用に屬するものなれども、是れ亦天理に従つて思慮選擇決定すれば之を不好の事と謂ふべからず。故に意思の不好なるは私意人欲の加はりたる時にあるのみ。好色を好むが如く惡臭を惡むが如くせずして自ら欺くに在るのみ。

(ロ) 意及び志。次に考察すべきものは意と志との關係なり。意は前に擧ぐるが如く心の商量運用して選擇決定する作用なれども、志は心之所之のものにしてその決定したる方向に進むの作用なり。故に意の發する所には善惡あれども、善に一にして自ら欺くことなければ意は誠となるべし。而して志は思慮選擇して決定したる目的なれば、善に一にして毫も惡を雜ふる所なしと謂はざるべからず。朱子が志を以て公然主張する目的のものと爲すは此れが爲めなり。其の言に

心之所_レ之謂_ニ之志。日之所_レ之謂_ニ之時。志字從_レ之從_レ心。時字從_レ之從_レ日。如_レ日在_レ午時。在_レ寅時。制字之義由_レ此。志是心之所_レ之。一直去底。意又是志之經營往來底。是那志底脚。凡營爲謀度往來皆意也。所_レ以橫渠云_ニ志公而意私_一。(同上卷五、十五頁)

志是公然主張。要做事底。意是私地潛行間發處。志如_レ伐。意如_レ侵。(同上卷五、十五頁)

と云へるもの即ち是れなり。蓋し志は意の作用の一部分に屬する者にして意の全體を蔽ふものにあらず。又志は今の語を以て云へば目的觀念又は理想觀念と稱すべきものにして、此れには全體の志と部分の志とあり。部分の志は日常に於ける一事一物を爲すに當りて立つるものにして全體の志は一生の全體を蔽ふものなり。而して部分の志は全體の志の一部分に屬するものなれば全體の志を離れて部分の志のあるべき理なきなり。何れにしても志は心の趣向する所に就て言ふものなれば道に志して其の心全く道に向ひ、學に志して其心全く學に向ひ、一直に做し去りて彼の事物を得るを要するが如きは是れ志にして、若し中間に作輟し或は退轉するが如きは之を以て志とは謂ひ得ざるべし。故に志を立つるには必ず之に趨向して期必する所の意あるべきを要す。若し眞實に志を立つるには聖賢を以て自ら期して便ち能く卓然として流俗の中より拔出づべく、波 隨ひ流を逐うて碌々たる庸人の歸とならざることを要す。吾人は能く是の如くにしてその理想の境に達するを得べきなり。

(ハ) 意及び才。才とは猶才質才能と云ふが如く、才質は體を以て云ひ、才能は用を以て云ふ。朱子の所謂才とは「人之能也。」又は「人之力也。」の意味あり。孟子に所謂「非才之罪」及び「天之降才。非爾殊。」等の語に據れば皆才を以て善なるものと爲し、他の只是れ其の性善大本上より發し來るを以て便ち都て一般的のものと爲すに似たり。今その言に據れば

才。是。心。之。力。是。有。氣。力。去。做。底。心。是。管。攝。主。宰。者。此。心。之。所。以。大。也。心。譬。水。也。性。水。之。理。也。性。所。以。立。乎。水。之。靜。情。所。以。行。乎。水。之。動。欲。則。水。之。流。而。至。於。濫。也。才。者。水。之。氣。力。所。以。能。流。者。然。其。流。有。急。有。緩。則。是。才。之。不。同。伊。川。謂。性。稟。於。天。才。稟。于。氣。是。也。只。有。性。是。一。定。情。與。心。與。才。便。合。着。氣。了。心。本。未。嘗。不。同。隨。入。生。得。來。便。別。了。情。則。可。以。善。可。以。惡。(同上卷五、十五頁)

性者心之理。情者心之動。才便是那情之會恁地者。情與才絶相近。但情是遇物而發。路陌曲折。恁地去底。才是那會如此底。要之千頭萬緒。皆是從心上來。(同上卷五、十六頁)

と云へり。此れに據れば才には理より來るものと氣より來るものとありて、理より來るものは善となり得べきものにして、氣より來るものは時に當りて不善となり得べきものと謂はざるべからず。かの孟子が「若夫爲不善。非才之罪也。」と云へるものは、朱子が之を解して「人有是性。則有是才。性既善則才亦善。人之爲不善。乃物欲陷溺而然。非其才之罪也。」(孟子集注卷之六)と云へるが如く性より發露し來る才に就て説明したるものなれば善と認めざるを得ずと雖も、若し一般的にいへば氣より

起るべきものあり。理より起り來るべきものあれば善なるものと惡なるものとありと謂はざるべからず。故に程伊川は之を論じて

性卽理也。理則堯舜至於塗人一也。才稟於氣。氣有清濁。稟其清者爲賢。稟其濁者爲愚。學而知之。則氣無清濁。可至於善而復性之本。湯武身之是也。孔子所言下愚不移者。則自暴自棄之人也。(孟子集注卷之六)

と云へり。然るに朱子は孟子及び程子の説を論じて程子を以て精密と爲して以爲らく、

程子此說才字。與孟子本文小異。蓋孟子專指其發於性者言之。故以爲才無不善。程子兼指其稟於氣者言之。則人之才固有昏明強弱之不同矣。張子所謂氣質之性是也。二說雖殊。各有所當。然以事理考之。程子爲密。益氣質所稟。雖有不善。而不害性之本善。性雖本善。而不可以無省察矯揉之功。學者所當深玩也。(孟子集注卷之六)

此れに由りて之を觀れば才には人の性より發し來るものと氣より發し來るものと別の別ありて性より發し來るものは善なりと云はざるを得ずと雖も、氣より發するものは惡なりと云はざるべからず。故に此の議論は程子の説は性の一面に偏せずして性氣兩面より見たるものなれば程子の説を以て精密と爲すべし。蓋し才は是れ此の如く故らに做し去るものにして有力なる意思の作用に屬す。性は本と好く情に發するも亦好く發用して做し去るに及んでも亦只是れ好し。然るに其の才を盡し

能はざるものは私意の爲めに阻隔せらるゝに由らざるばならず。惻隱の才を盡すが如きは一赤子の微を救濟するより漸次擴充發展して博施濟衆に至らざるべからず。羞惡の才を盡すは必ず當に一介も以て人に與へず一介も以て之を人に取らず。之に千乘を祿するも顧みず繫馬千駟も視ざるに至らざるべからず。その他の辭讓是非の才亦然り。吾人は本來此に至るべきの才を有するを以て能く進みて此の境に達するを得べし。

(二) 情意の作用。吾人の有する知覺作用は宇宙及び人生に於ける一切の理を認識するの作用を爲すものなれども、宇宙の理に關しては已に前に述べたれば此中には之を論せず。人生の理に關してはその根本原理たる所以然の理即ち性を認識するのみならず、その現象界に發現したる所當然の理即ち情を認識するを得べし。而して性は渾然たる全體の理にして人性の根本原理たるものなれども、之を分析すれば仁義禮智の四徳を爲すを得べく、性の發現したる情は之を分析すれば惻隱の心、羞惡の心、恭敬の心、是非の心と爲すを得べし。此の四性及び四端の心は人生の理の紀綱にして人生に於ける所有理を包括統一するものなれば、人生の理は之を外にして論ずるを得べきものにあらず。故に此には四端の情に就てその大要を論ずべし。

(イ) 情の作用。蓋し四端の心は人生の紀綱にして惻隱の心は惻隱羞惡恭敬是非の心の綱紀なり。故に先づ擧げて論せざるべからざるものは惻隱の心にして、惻隱の心は一に之を稱して不忍の心と

爲すを得べし。不忍の心はもと天地物を生ずるの心の人に與へられたるものにして、人には此の心を有するが故に能く天地萬物を包容して一體と爲し、一物をも生存するを以てその心と爲さるることあるなし。蓋し人には此の心を固有するを以て苟も吾人の生を害するが如きことあらば須臾も之を抛擲するを得るものにあらずして、直に怵惕惻隱の心を生じ來りて之を救濟することを務むべし。孟子が擧げたる孺子の井に入らんとするを見ては何人も怵惕惻隱の心を起さるものなかるべし。此の心はもと交りを孺子の父母に納れんが爲めに起るものにあらず、又譽を郷黨朋友に要めんが爲めに起るものにあらず。其の聲を悪んで起るものにもあらずして、眞實の心より發し來りて眞にその人を救濟せんとする純眞純誠の情より起り來るものなり。之に次ぎて他の機に觸るゝときは羞惡の情となり辭讓の心となり是非の心となりて思はず識らざるの間に發し來るべし。此れに據れば不忍の心はもと一なりと雖も機に觸れ事に應ずる時は種々の心情となりて現はるゝものとす。朱子が此の理を説いて

人皆有_レ不_レ忍_レ人之心者。是得_レ天地生物之心爲_レ心也。盖無_レ天地生物之心。則沒_レ這身。才有_レ這血氣之身。便具_レ天地生物之心。矣（朱子語類卷五十三、三頁）

天地以_レ生物爲_レ心。天包_レ着_レ地。別無_レ所作爲。只是生物而已。亙古亙今。生々不窮。人物則得_レ此生生物之心以爲_レ心。所以箇々肖_レ他。本不_レ須_レ說_レ以_レ生物爲_レ心。緣_レ做_レ箇_レ語_レ句_レ難_レ做。着_レ箇_レ以_レ生物爲_レ

心。(朱子語類卷五十三、四頁)

天地以生_レ生物爲_レ心。譬如甑蒸飯。氣從下面滾。到上面又滾下。只管在裏面滾。便蒸得熟。天地只是包_レ許多氣。在這裏無出處。滾一番便生_レ一番物。他別無勾當。只是生物。不似_レ人便有許多應接。所謂爲_レ心者。豈是切々然去做。如云天命之。豈諄々然命之也。但如磨子相似。只管磨出這物事。人便是小胞。天地是大胞。人首圓象天。足方象地。中間虛包_レ許多生氣。自是惻隱。不是爲_レ見_レ人我一理。後方有此惻隱。而今便教單獨只有_レ二箇人。也自有_レ這惻隱。若謂見_レ人我一理。而後有_レ之。便是兩人相夾在這裏。方有_レ惻隱。則是仁在_レ外非由_レ內也。且如乍見_レ孺子入_レ井時有_レ惻隱。若見_レ他人入_レ井時。也須自有_レ惻隱在_レ。(同上卷五十三、五頁)

と云ふが如きは是れなり。此れに據れば惻隱の心と不忍の心とはも同一のものにして、人の情の慈愛惻怛見聞に忍びざる所より之を不忍の心と云ひ、又その情の傷痛の深切なる所より之を惻隱の心と云ふ。故に朱子の集注には「惻傷之切也。隱痛之深也。此即所謂不忍人之心也。」と云へり。此の不忍の心も惻隱の心も本來仁の徳の事機に應じて發現したるものにして、その他の四端の心は皆その中に包容統攝せらるべし。蓋し惻隱の心が他の四徳を包容統攝することは、仁の徳の他の仁義禮智の四徳を包容統攝すると同じく、惻隱羞惡辭讓是非の四心を包容統攝すべし。故に勢力の關係を以て云へば惻隱の心も羞惡の心も辭讓是非の心も皆是れより發展活動するものなり。然れば惻隱の

心は惻隱の心の惻隱にして羞惡の心は惻隱の心の羞惡、辭讓の心は惻隱の心の辭讓、是非の心は惻隱の心の是非なりと謂ふを得べきなり。然るに體用の關係を以て云へば是非の心は體(骨子の意味)にして惻隱羞惡辭讓の心は用に屬するを以て、是非の心に藏する諸他の情は是非の心より發展活動するものにして、是非の心は漸次發展して惻隱の心となり羞惡の心となり恭敬辭讓の心となり又是非の心となるべし。朱子此の理を説いて以爲らく

惻隱之心。頭尾都是惻隱。三者則頭是惻隱。尾是羞惡辭遜是非。若不是惻隱。則三者都是死物。蓋惻隱是箇頭子。羞惡辭遜是非。便從這裏發來。(同上卷五十三、九頁)

方其乍見孺子入井時。也着脚手不得。縱有許多私意要譽鄉黨之類。也未暇思量到。但更遲霎時。則不得也。是非辭遜羞惡。雖是與惻隱並說。但此三者皆自惻隱中發出來。因有惻隱。後方有此

三者。惻隱比二者。又較大得些子。(同上五頁)

と云へるが如き即ち是れなり。此れに據れば惻隱の心はその量より云へばその心の全體にしてその中には部分的惻隱の心も羞惡辭讓是非の心も包容統一せられて、而も之を一貫するものは惻隱の心なること、元の生氣の元亨利貞の義を一貫するが如く、又春氣の春夏秋冬の氣を一貫するが如し。若し吾人に惻隱生々の氣の存すことなくんば、羞惡の心の起り得べき理なく辭讓是非の心の起り得べき理なし。朱子は謝上蔡の事に由りて惻隱の心が主となりて羞惡辭讓是非の心の現はれ來ることを説いて

黃景申嵩老問。仁兼四端意思。理會不透。曰。謝上蔡見明道先生。舉史文成誦。明道謂其玩物喪志。上蔡汗流浹背。面發赤色。明道云。此便見得惻隱之心。公且道上蔡聞得過失。恁地慚皇。自是羞惡之心如何。却說道見得惻隱之心。公試思。久之先生曰。惟是有惻隱之心。方會動。若無惻隱之心。却不_{ベカ}會動。惟是先動了。方始有羞惡。方始有恭敬。方始有是非。動處便是惻隱。若不_{ベカ}會動却不_{ベカ}成人。若不_{ベカ}從動處發出。所謂羞惡者非羞惡。所謂恭敬者非恭敬。所謂是非者非是非。天地生々之理。這些動意。未嘗止息。看如何枯亡。未嘗消滅。自是有時而動。學者只怕_レ間斷了。(同上卷五十三、二十二頁)

と云へり。然れば吾人が羞惡の心を發するに當りても辭讓是非の心を發するに當りても、その心の根抵には惻隱の心の一貫して流るゝを知るべし。是れ朱子が惻隱の心の他の三情を包容統一するを説く所以にしてその理なしと謂ふべからず。上文に述べたるが如く吾人はもと宇宙生々の理を具_レ有するを以て此の理事に觸れて惻隱不忍の心となりて現はれざるを得ざる自然の理ありて存す。故に父母に遇へば之れに對して惻隱せざるを得ず、兄弟に遇へば之れに對して惻隱せざるを得ず、他人の哀憐すべきに遇へば之れに對して惻隱せざるを得ざるものあり、時として處として發せざることなきものは惻隱の心にして程明道の所謂「滿腔子是惻隱之心」とは蓋し之を謂へるなり。朱子の所謂只是滿_レ這箇軀殼都是惻隱之心。纔築着便是箇物事出來。大感則大應。小感則小應。恰似大段痛

傷固是痛。只如針子。略挑血也出。也便痛。故日用所當應接。更無些子間隔。癢痲疾痛。莫不相關。終是有些子不通。便是被些私意隔了。(同上、七頁)

仁言惻隱之端。如水之動處。蓋水平靜而流。則不見其動。流到灘石之地。有以觸之。則其勢必動。動則有可見之端。如仁之體存之於心。若愛親敬兄。皆是此心本然。初無可見。及其發而接物。有所感動。此心惻然。所以可見。如怵惕於孺子入井之類是也。(同上、十二頁)

は此の理を説けるものにして、吾人の滿腔子すべて惻隱の心なるを以てその逢遇する事毎に此心發し來らずと云ふことなきなり。然るに滿腔子すべて惻隱の心たるのみならず、羞惡恭敬是非の心皆腔子に滿つるを以て、その發する所亦羞惡恭敬是非の心にあらざることなし。故に朱子は

滿腔子是惻隱之心。不特是惻隱之心滿腔子。是羞惡之心滿腔子。是辭遜之心滿腔子。是是非之心。彌滿充實。都無空闕處。滿腔子是惻隱之心。如將刀割着固是痛。若將針割着也痛。如爛打一頓固是痛。便輕搯一下也痛。此類可見。(同上卷五十三、九頁)

と云へり。蓋し四端の心は吾が全身に充滿して些少の空隙なきものなれば、頭の先より足の末に至るまで觸るゝ所發せざることなきが如く、少しくその機に觸れば惻隱羞惡辭讓是非の心の發し來らざることなきなり。若しその發せざることあれば私欲の爲めに沮礙せられたるものにして、人心の本然にあらざると云はざるべからず。蓋し此の四端の心はもと仁義禮智の性の發現したるものなれば

本來純粹無垢にして善なるものなり。その心の理に會はざるものあるは人欲の私に出づるが故なり。朱子此の理を説いて

四端皆是自_レ人心發出。惻隱本是說愛。愛則是說仁。如見_レ孺子將入井而救之。此心只是愛。這孺子惻隱元在這心裏面。被外面事觸起。羞惡辭遜是非亦然。格物便是從此四者推將去。要見裏面是甚底物事。(同上卷五十三、十頁)

未發時無形影可見。但於已發時照見。謂如見_レ孺子入井。而有_レ怵惕惻隱之心。便照見得有_レ仁在裏面。見_レ穿窬之類。而有_レ羞惡之心。便照見得有_レ義在裏面。然而仁未有_レ惻隱之心。只是箇愛底心。義未有_レ羞惡之心。只是箇斷底心。惟是先有_レ這物事在裏面。但隨所_レ感觸。便自是發出來。故見_レ孺子入井。便有_レ惻隱之心。見_レ穿窬之類。便有_レ羞惡之心。見_レ尊長之屬。有_レ恭敬之心。見_レ得是便有_レ是之心。見_レ得非便有_レ非之心。從_レ那縫罅裡迸將來。恰似寶塔裏面四面毫光放出來。(同上卷五十三、十二頁)

と云へり。此れに據れば惻隱の心はもと心の溫和慈愛道理の發したるもの、羞惡の心はもと心の斷制裁割底道理の發したるもの、辭讓の心はもと心の恭敬擗節底道理の發したるもの、是非の心はもと分別是非底道理の發したるものにして、是非の心の智的作用なるは論を俟たず、惻隱の心は情的作用に屬し、羞惡の心及び辭讓の心の意的作用に屬し、而して惻隱の心は廣義の情と稱すべきものにして一面に於ては狹義の惻隱の心及び羞惡辭讓是非の心を包容統一する大徳たることは前に述べ

る所の如きなり。

(ロ) 意の作用。羞惡の心は意思の作用にしてその根柢たるものは義に在り。吾人はもと義の性を有するを以てその性事に觸れ物に接すればその端緒現はれて羞惡の心となる。羞はもと自ら當に爲すべからざることを爲したる時發する羞恥の念にして、惡はもと他人か當に爲すべからざること爲したる時に發する憎惡の念を指して云ふ。故に朱子は羞惡の心に定義を下して

羞恥己之不善也。惡憎人之不善也。(孟子集注卷之二)

と云へり。然るに惡は獨り人の不善を憎惡するのみにあらずして自己の不善をも憎惡することなきにあらず。孟子の所謂「生亦我所欲也。義亦我所欲也。二者不可得兼。舍生而取義者也。生亦我所欲。所欲有甚於生者。故不爲苟得也。死亦我所欲。所惡有甚於死者。故患有所不辟也。」(孟子告子章句上)の如きは死を惡む心と不義を惡む心とを把りて之を比較し不義を惡む心の死を惡むの心より強きことを説けるものにして、此の念は獨り賢者のみ有するものにあらずして、何人にも有する所なれども、賢者は能く此の心を保持して喪はざるのみなり。故に孟子は「由是則生而有不用也。由是則可以辟患。而有不爲也。是故所欲有甚於生者。所惡有甚於死者。非獨賢者有是心也。人皆有之。賢者能勿喪耳。」(同上)と云へり。是れに由りて之を觀れば人には自己の不義を惡む心の甚だ強烈なるものあるを知るべし。是れ朱子が

上蔡謂。義重於生。則舍生取義。生重於義。則舍義取生。此說不然。義無可舍之理。當死而死。

義在於死。不當死而死。義在於不死。無往而非義。(朱子語類卷五十九、三十一頁)

と云へる所以にして人には不義を惡むの念の強烈なるものありと雖も、利害に關する私念の起ることあれば、之れが爲めに昏蔽せられて遂に不義を取りて之を行ひ錯亂迷妄至らざる所なきに至るべし。是れ孟子が「一簞食一豆羹。得之則生。弗得則死。噉爾而與之。行道之人弗受。蹴爾而與之。乞人不屑也。萬鍾則不辨禮義而受之。萬鍾於我何加焉。爲宮室之美。妻妾之奉。所識窮乏者得我與。」(孟子告子章句上)と云へる所以にして、吾人が固有する羞惡の心の端緒を擴充發展すべき所以の意は正に此に在り。而して羞耻心も亦憎惡の心と同じく人の有するものにして、自己が不善を爲したる後に於て發するは勿論、自己の人格が人に比して劣れるを感ずる時にも發する所なり。孟子は耻に就て「人不可無以耻。無耻之耻無耻矣。」(孟子盡心章句上)と云ひ、又「耻之於人大矣。爲機變之巧者。無所用耻焉。不耻不若人。何若人有。」(同上)と云へり。人は不義の行爲を爲したる時に起るべき羞恥の事を行爲せざるに先だつて感知せざるにあらざれども、多くは既に行爲したる後に至りて起るものゝ如し。惻隱の心は積極的にして吾人が内に有するものを以て外に發し、進んで人に對し天下社會に對して之を與ふるものなれども、羞惡の心は消極的にして吾が我に對して收縮緊束して内に退いて守るが如き所あり。故に吾人は自己の不善なるを羞耻したる時は再びかゝる不善

なることは爲すまじと云ふ決心となりて向上發展すべく、又吾人の人格が甚だしく人に劣れるを感ずる時は之を修養して高潔偉大ならしむべきものにして、此の心の存すると否とは善惡人鬼の分るゝ所なれば極めて大切なるものあり。然るに此の羞恥心の發するに當りて之を妨礙して自ら恕するものは私心の存在なり。一たび私心起れば遂には厚顔無耻にして放肆邪侈至らざる所なきに陥らしむべくして、自己を害し社會を毒すること此れより甚だしきはなし。是れ孟子が羞恥心の端緒を擴究發展して些細の事に至るまで羞惡せざることなきに至らしむるを説く所以なり。

吾人は惻隱羞惡の心の外に恭敬辭讓の心あり。恭敬は體にして辭讓は用なり。故に内に恭敬の心あれば必ず外に辭讓の心となりて現はるゝものとす。故に此の二者は相雜るべからざる關係ありて、内に恭敬心なくして外に辭讓の情あるものは未だ嘗てあらざるなり。朱子は恭敬と辭讓とを解釋して

恭者敬之發於外者也。敬者恭之主於中者也。(孟子集注卷之六)

恭主容。敬主事。有事著心做。不易其心而爲之是敬。恭形于外。敬主于中。自誠身而言。則恭較緊。自行事而言。則敬爲切。(朱子語類卷六、二十五頁)

辭解使去己也。讓推以與人也。(孟子集注卷之二)

と云へり。此れに據れば恭と敬とは同一心情の表裏にして恭は敬みの心の外に現はれたる者、敬は恭

みの心の内に存するものなれば、此の二者は形影の如く未だ内に敬なくして外能く恭しき者あらず。又未だ外能く恭しくして内に敬なき者あらざるべし。而して辭讓の心は朱子の解したるが如く自己に有るものを解きて推して以て人に與へて之を有せざることを謂ふ。例へば自己に有する尊敬の念を以て推して人に與へて自己は之に對して退讓恭謙にして自己に有せざるが如きは是れなり。故に恭敬の心は體にして辭讓の心は用なれば此の二者は恭と敬との關係と同じく表裏内外の關係ありて、内に恭敬の心あれば外に辭讓の動作となりて現はるゝを常とす。若し内に恭敬の心なくして外に辭讓の動作を爲すことあれば、是れ虚禮虚飾にして道德的行爲と謂ふべからざるなり。

此の恭敬には二種の意味あり。一は自己に對する恭敬の念にして二は他人に對する恭敬の念なり。而して自己に對する恭敬の心は自己が自己の人格を尊重するものにして他に對する恭敬の心の基礎なり。蓋し敬とは程子の謂へるが如く主一無適の謂ひにして、主一はその心その事を專一として他に移らず、無適とはその心他に走作せず一を守るを謂ふ。故に意讀書に在れば讀書の心專一にして他に移らず、意義理を講ずる心在れば義理を講ずる心專一にして他に移らざるが如きは是れなり。故に朱子は此の理を説いて

主一只是專一。不以他念雜之。無適只是不走作。如讀書時只讀書。著衣時只著衣。了此一件。又做二事。身在這裏。心亦在這裏。(大學或問大全四頁)

今講學更須於主一上做工夫。若無主一工夫。則講底義理無安着處。都不是自家物事。若有主一底工夫。則外面許多義理。方始爲我有。都是自家物事。工夫到時纔主一。便覺意思好卓然精明。(同上四頁)

と云へり。此れに據れば主一とは天理に専らにして他に移らざるを謂ふものなれば、私欲上の事に専一なるを謂ふにあらざることは論ずるを俟たず。蓋し敬は寂然不動にして未だ見聞せざるの時と雖も、一念の微未だ外に現はれずして動作とならざる時と雖も常に畏敬の念を離れず。その外に現はれて動作となるや一語一默一舉一動の微と雖も常に畏敬の念を離れざるを云ふものなれば、此の裏に自己の人格を尊重して輕侮せざるの意自ら存するなり。此の心は即ち他敬の念の根柢となるべきものにして、吾人が他人の人格を尊敬するの念の如きは此の心を他に及ぼしたるに過ぎざるなり。蓋し恭敬の心は一にして二あるものにあらず。此の心自己に對しては自敬の念となり他人に對しては敬他の念となる。その父母を尊敬し君主を尊敬し長上を尊敬し朋友を尊敬するが如き皆是れなり。已に他を尊敬すれば自己に在るものを解いて之を其の人に推與するの行動に出づることはその結果なり。是れ孟子が恭敬の心を説き又辭讓の心を説く所以なり。而して恭敬の心の外に現はれてその事の節文を得たるものを禮と爲す。禮には二箇の意味ありてその性の徳たるものは外に發したる禮法の根柢となるべきものにして、形象の見るべきものなく聲臭の聞くべきものなき未發の

理なれども、その已に發して恭敬の心となり更に發して禮法となれば恭敬節文の法則の文ありて之を見るを得べし。朱子が禮を定義して「禮者天理之節文。人事之儀則也。」と云へるもの是なり。朱子の言に

禮卽理也。但謂之理。則疑若未有形迹之可言。制而爲禮。則有品節文章之可見矣。人事如五者。圖皆可見其大概之所宜。然到禮上。方見其威儀法則之詳也。(朱子文集卷六十、十九頁)

と云へるを見れば禮はその厚薄親疎尊卑小大相接するの體各節文ありて節に中らざるなく、その程々の宜しきを得たるものにして恭敬の心現はれて此に至ればその威儀禮貌皆齊美なるものあり。

(三) 修爲の作用 四端の心は獨り聖人のみ特に有するものにあらずして何人も之を有すること
は、孟子が「由是觀之。無惻隱之心非人也。無羞惡之心非人也。無辭讓之心非人也。無是非之心非人也。人之有是四端也。猶其有四體也。」と云へるによりて之を知るを得べし。而して仁義禮智の性は先天未發のものなれども、事物に接するや毫も意思する所なくして自然に發現し來りて惻隱羞惡辭讓是非の心となること、恰も事物の端緒の事に觸れ物に接して外に現はるゝに異ならざるものあり。然るにその端緒の外に發するや其の初めは甚だ微小にして未だ廣大ならざるものあり。又四端の心は性の發現なれば純然たる善なるものなれども、此の心の發するに當りて忽ちにして人欲の私の之に混入することありて、所謂「内交於孺子之父母。要譽於鄉黨朋友。惡其聲而然。」が如きも

の生せずんばあらず。是に於て吾人は此心の發現の微小なるものは之を擴充發展して廣大ならしむべく、而して私心の發現するものは之を反省して除去するに務めざるべからず、故に朱子は二箇の修爲の道を説けり。一を反求と云ひ、一を擴充と云ふ。反求はその發展を阻礙する私欲を除き去るの工夫にして消極的のものなれども、擴充はその發展を推廣めてその本然の量を充滿せしむるの工夫にして積極的工夫に屬するものなり。此の二箇の工夫は積極と消極との相異ありて雖も共に四端の心を發展せしむるに至りては一なりと謂ふべし。

(イ) 反求の工夫 吾人の本心はもと性より發現したるものなるを以てその發する所純然たる善なり。然るに時ありて人欲の私の爲めに昏蔽せられて不善に流るゝことなきにあらず。故に吾人はその人欲の私を除去するを務めざるべからず。朱子の所謂

如惻隱羞惡辭讓是非。是徒自家心裡出來。觸着那物。便是那箇物出來。何嘗不明。緣爲物欲所蔽。故其明易昏。如鏡本明。被外物點汚。則不明了。少間磨起。則其明又能照物。(朱子語類卷十四、

十五頁)

蓋人心至靈。有什麼事不知。有什麼事不曉。有什麼道理不具在。這理何緣有不明。爲是氣稟之偏。又爲物欲所亂。如目之於色。耳之於聲。口之於味。鼻之於臭。四肢之於安佚。所以不明。然而其德本是至明物事。終是遮不得。學者便當因其明處。下工夫一向明將去。致知格物皆

是事也。(同上卷十四、十六頁)

の如き即ち是れなり。蓋し吾人の現實に就ていへば四端の心を有することは疑べかふらずと雖も、又一面には氣稟あり物欲あるを以て遂にその四端の心を蔽うて活動せしめざることなきにあらず。是れ修養の必要ある所以にして吾人が一たびその蔽はれたるを知る時は四端の本心即ち在りて他に求むるを俟たず。故に朱子は

放心只是知得便不放。如雞犬之放。或有隔一宿求不得底。或有被一人殺終身求不得底。如心才知是放。則心便在這裏。(朱子語類卷五十九、三十四頁)

問求放心。愈求則愈昏亂如何。曰即求者便是賢心也。知求則心在矣。今以已在之心復求心。即是有兩心矣。雖曰譬之雞犬。雞犬却須尋求乃得。此心不得宛轉尋求。即覺其失。覺處即心。何更求爲。自此更求。自然愈失。此用力甚不多。但只要常知提醒爾。(同上卷五十九、三十四頁)

と云へり。蓋し私欲を除き去るは別に一心を以て一心を去るの謂ひにあらずして、私欲によりてその心の昏蔽せらるゝを覺るときは、本心即ち在りて私欲の除き去られたるが如く感すべし。此れを稱してその放心を求むと云ふ。故に朱子は又「人心終覺時便在。孟子說求放心。求字早是遲了。」と云ひ、「求放心也不是在外面求得箇放心來。只是求時便在我。欲仁斯仁至矣。只是欲仁便是仁了。」と云へり。此れ所謂求放心の法にして此の外更に反求の法あるにあらざるなり。朱子は此の本心物欲

の爲めに昏蔽せらるゝ時は、その存する所希なりと雖も全く滅亡するものにあらざるを以て能く存すべきの理を述べて曰く、

氣清則心清。其日夜之所息。平旦之氣。盖是靜時有這好處發見。緣人有不好處多。所以終有不好處。便被那不好處勝了。不容他好處滋長。然孟子此說只爲常人言之。其實此理日間亦有發見時。不止夜與平旦。所以孟子收拾在操則存舍則亡上。盖爲此心操之則存也。(同上卷五十九、二十六頁)

操則存。捨則亡。只是人能持此心則心在。若捨之便如去失了。求放心不是別有一物在外旋去。收拾回來只是此。頻要省察。才覺不在。便收之爾。(同上卷五十九、二十七頁)

此れに據れば反求は吾人の本心をして私欲心を同化せしめ統一せしむるの法に外ならざるなり。

(ロ) 擴充の工夫。吾人の初め四端の心を發するや只その端緒のみにして全體の心の發動せざること少からず。今その一例を擧ぐればかの齊宣王が能く一牛の殲觶として罪なくして死地に就くが若くなるに忍びずしてその鐘に響ぬることを廢せしめたれども、その忍びざるの心を推し廣めて百姓に及ぼすを知らずして、甲兵を興し士臣を危くし怨を諸侯に構ひて大に欲する所を遂げんとするが如く、一事一物に對しては能く惻隱の心を發すれども、他の萬事萬物に對しては之を擴充すること能はざるもの亦少からず。故に吾人が此の心を全うせんとするには前に述ぶるが如く一面に於て私欲の蒙蔽を除かざるべからざると共に、一面に於て善心の端緒を養成してその本然の量を充滿發

展せしめざるべからず。朱子の所謂

凡有_レ四_レ端_レ於_レ我_レ者。知_レ皆_レ擴_レ而_レ充_レ之。只是_レ要_レ擴_レ而_レ充_レ之。而今_レ四_レ端_レ之_レ發。甚有_レ不_レ整_レ齊_レ處。有_レ惻_レ隱_レ處。有_レ合_レ惻_レ隱_レ而_レ不_レ惻_レ隱_レ處。有_レ羞_レ惡_レ處。又有_レ合_レ羞_レ惡_レ而_レ不_レ羞_レ惡_レ處。且_レ如_レ齊_レ宣_レ不_レ忍_レ於_レ一_レ牛。而_レ却_レ不_レ愛_レ百姓。噉_レ爾_レ之_レ食。則_レ知_レ惡_レ而_レ弗_レ受。至於_レ萬_レ鍾_レ之_レ祿。則_レ不_レ辨_レ禮_レ義_レ而_レ受_レ之。而今_レ則_レ要_レ就_レ這_レ處_レ理_レ會。

(朱子語類卷五十三、十七頁)

知_レ皆_レ擴_レ而_レ充_レ之。如_レ惻_レ隱_レ之_レ心_レ是_レ仁。則_レ每_レ事_レ皆_レ當_レ擴_レ而_レ爲_レ仁。羞_レ惡_レ之_レ心_レ是_レ義。則_レ皆_レ當_レ擴_レ而_レ爲_レ義。爲_レ禮爲_レ知。亦_レ各_レ如_レ此。今_レ有_レ二_レ種_レ人。雖_レ然_レ知_レ得。又_レ道_レ是_レ這_レ箇_レ也_レ無_レ妨。而_レ今_レ未_レ能_レ理_レ會_レ得。又_レ且_レ恁_レ地_レ如_レ知_レ這_レ事_レ做_レ得_レ不_レ是。得_レ入_レ憎_レ面_レ前。也_レ皇_レ恐_レ識_レ得_レ可_レ羞。又_レ却_レ不_レ能_レ改。如_レ今_レ人_レ受_レ入_レ之_レ物。既_レ知_レ是_レ不_レ當_レ受。便_レ不_レ受_レ可_レ也。心_レ裏_レ又_レ要_レ却_レ說_レ是_レ我_レ且_レ受_レ去_レ莫_レ管。這_レ便_レ是_レ不_レ能_レ充。但_レ當_レ於_レ知_レ之_レ初。一_レ向_レ從_レ這_レ裏_レ充_レ將_レ去。便_レ廣_レ大_レ如_レ火_レ之_レ始_レ然_レ泉_レ之_レ始_レ達。始_レ然_レ始_レ達。能_レ有_レ幾_レ多。於_レ這_レ裏_レ便_レ當_レ幹_レ開_レ放_レ出_レ使_レ四_レ散_レ流_レ出_レ去。便_レ是_レ能_レ廣。如_レ怵_レ惕_レ孺_レ子_レ入_レ井_レ之_レ心。這_レ一_レ些_レ子_レ能_レ做_レ得_レ甚_レ事。若_レ不_レ能_レ充。今_レ日_レ這_レ些_レ子_レ發_レ了_レ又_レ過_レ却。明_レ日_レ這_レ些_レ子_レ發_レ了_レ又_レ過_レ却。都_レ只_レ是_レ閑。若_レ能_レ廣_レ充。於_レ這_レ一_レ事_レ發_レ見。知_レ得_レ這_レ是_レ惻_レ隱_レ之_レ心_レ是_レ仁。於_レ別_レ底_レ事。便_レ當_レ將_レ此_レ心_レ充_レ去_レ使_レ事_レ々_レ是_レ仁。如_レ不_レ欲_レ害_レ人。這_レ是_レ本_レ心。這_レ是_レ不_レ忍_レ處。若_レ能_レ充_レ之。於_レ每_レ事_レ上。有_レ害_レ人_レ之_レ處。便_レ不_レ可_レ做。這_レ也_レ是_レ充_レ其_レ惻_レ隱。(同上、十六頁)

の如きは即ち是れにして朱子は主として惻隱の心を説けりと雖もその擴充すべきものは三端の心皆

然り。蓋し四端の心の氣を通じて發現するや、その始めは一滴の水の水源より發するが如く又一星の火の將に燃えんとする星火の如きものにして、その勢甚だ微小なるものあり。又一事に於ては然るも事々皆然ること能はざることあり。是に於てか微小なるものは之を推廣むれば廣大となり、又一事に於て然るものは之を推廣むれば、事々皆然ることとなりて能く本然の量を充滿せしむるを得べきこと、一滴の水の溜々として流れて海に達するが如く、一星の火の炎々として燃えて燎原の大火となるが如く、遂にはその理想の境に到達せずんば已まざるに至るを得べきなり。而して吾人が此の境に達するを得るは、始めより擴充發展の結果は此に達すべきの理を知りて、然る後體驗して此の境に至るべきものあればなり。若し先づ擴充すべきの理を知らずんば安んぞ之を體驗するを得んや。故に朱子は此の理を述べて

不能擴充者。正爲不知。都只是冷過了。若能知而擴充。其勢甚順。如乘快馬放下水缸相似。
(同上卷五十三、十五頁)

惻隱之心仁之端也。乍見孺子入井。此只是一件事。仁之端只是仁萌芽處。如羞惡辭遜是非。方是義禮智之萌芽處。要推廣充滿得自家本然之量。不特是孺子入井便恁地。其他事皆恁地。如羞惡辭遜是非。不特於一件事上恁地。要事事皆然。方是充滿慊足。無少欠闕也。知皆擴而充之矣。知方且是知得如此。至說到苟能充之足以保四海。即掉了廣字。只說充字。蓋知字與始然始達字相應。

充字與保四海相應。才知得便自不能已。若火始然便不可遏。泉才達便涓々流而不絕。(同上卷五十三、十六頁)

と云へり。蓋し吾人の心の本體の量はもと自ら廣大にして天地宇宙を包容し天下萬物を綜該するを得るものにして、所謂天地萬物を一體と爲して汎愛博利するを得べきものなり。然るに一たび人欲の私の爲めに蔽はるゝ時は此の心の本然の量爲めに縮小せられて、父母に對しては之を愛すれども兄弟に推廣むること能はず。能く之を一家に推廣むれども之を一國天下に推廣むること能はず。その推廣むる所甚だ狭くして全體に及ぼすこと能はず。此の一事に推廣むれども他の事々に推廣むること能はざるを以て我が心の本然の量を充滿するを得ざるに至るべし。是れ吾人が性の本體に復らんとするにはその心に有する全體の量を擴充發展せざるべからざる所以なり。故に朱子曰く

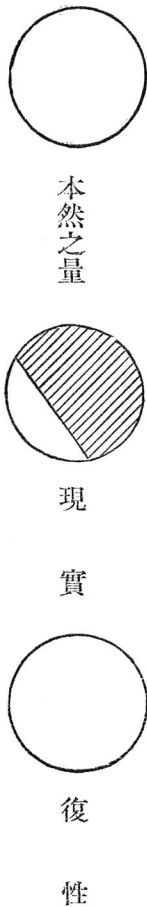
此心之量。本足以包括天地兼利萬物。只是人自不能充滿其量。所以推不去。或能推之於一家。而不能推之於一國。或能推之于一國。而不足以及天下。此皆是未盡其本然之量。須是充滿其量。自然足以保四海。(同上卷五十三、十九頁)

擴是張開。充是放滿。惻隱之心。不是只見孺子時有。事々都如此。今日就第一件事上推將去。

明日又就第二件事上推將去。漸々放開。自家及國。自國及天下。至足以保四海處。便是充得盡。擴充只是擴而充之。那曾有界限處。如手把筆落紙便自成字。不可道手是一樣。字又是一樣。孺

子入井在彼。惻隱之心在我。只是一箇物事。不可道孺子入井是他底。惻隱之心是我底。(同上)

此れに據れば四端の心の端緒は其の初め微小にしてその及ぶ所も一事に止まると雖も、之を擴充發展してその本來固有する本然の量を充滿せしむるれば、その心悉く天理となりて天地萬物一體の仁を完うするを得べく。所謂「如朋友相親。充之而無間斷。則貧病必相卹。患難必相死。至於仁民愛物。莫不皆然。則仁之理得矣。如朋友責善。充之而無間斷。則見惡必如惡惡臭。以至於除殘去穢戡暴禁亂。莫不皆然。則義之理得矣。如尊卑秩序。充之而無間斷。則不肯一時安於不正。以至於正天下之大倫。定天下之大分。莫不皆然。則禮之理得矣。如是是非非。充之則無間斷。而善惡義利公私之別。截然而不可亂。以至於分別忠佞。親君子遠小人。莫不皆然。則智之理得矣。」(同上卷五十三、二十頁)の如くなるべし。故に擴充は内心に於ける本然の量を充滿せしむると同時に、外部に發表する所を推廣めてその極に達するものなれば、内外主容共に到るものと謂はざるべからず。圖を以て表示すれば左の如し。



蓋し吾人の心の本然の量は完全圓滿にして些少の缺くる所なければ、その本然のまゝ發現すれば

亦完全圓滿なるを得べし。然るにその心の發現するに當りて人欲の私起りて本然の發現を妨礙するを以て、一面に於て之を去り一面に於て本然の發現を擴充すれば、始めてその本來固有する本然の量を充滿するを得てその性の本體に復ることを得べし。故に此の説は一面より見れば復性説と稱すべきものなれども、一面より見ればその性に固有する理を實現して本然の量を充滿する實現説とも謂ふを得べし。孟子が四端の心情に説き及び此の心情の性に根原して發現するを説くが如きは、前賢未だ發せざる所を發するものにして聖教に對する功勞極めて大なるものあり。朱子の説に所謂

孟子發明四端。乃孔子所未發。人只道孟子有關揚墨之功。殊不知他就人心上發如此。看來此說那時若行。揚墨亦不攻而自退。關揚墨是汗邊境之功。發明四端。是安社稷之功。若常體認得來。所謂活潑々地。眞箇是活潑々地。(同上十四頁)

とは是れ穩健なる批評にして四端の説を發明したるの功は眞に社稷を安んずるの大功に比すべきものあるは動かすべからざる所なり。